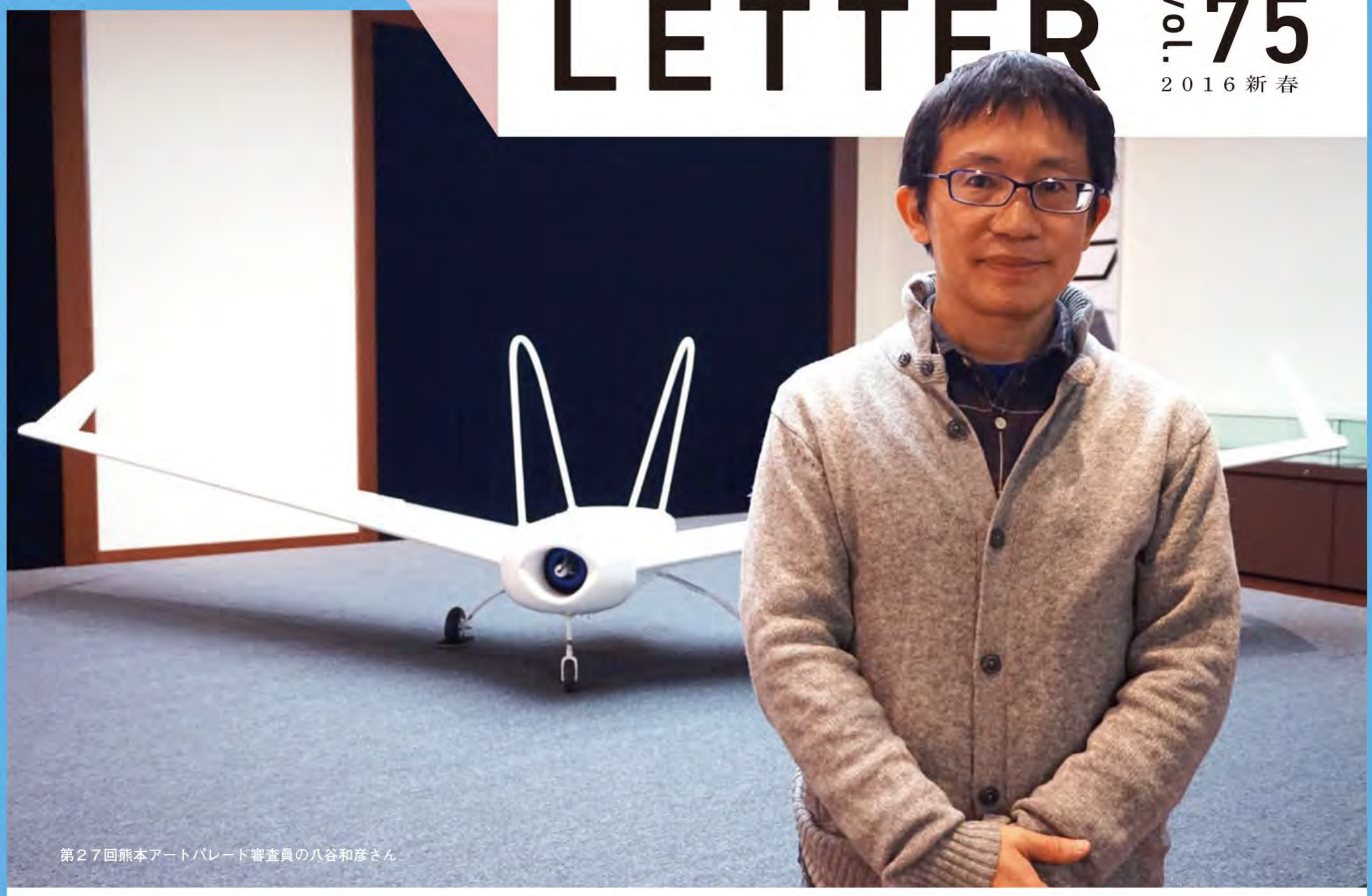
CAMK
熊本市現代美術館 アート・キッスレター ｜無料｜FREE

ART KISS LETTER

vol.75
2016新春



第27回熊本アートパレード審査員の八谷和彦さん

笑いのもつ生きる力―小川千甕の躍動する世界

古風とも言える歴史的、伝統的スタイルを一身に受け継ぐことにより、軽やかでより自由な現代的作風を展開した画家がいました。それは江戸時代からの流れをくむ「詩書画一致」と言われる南画家、小川千甕（せんよう）（1882～1971）でした。昨年末、たまたま京都文化博物館で京都出身の千甕の初めての回顧展を見る機会がありました。千甕は、少年時代はひたすら見事な仏画を描き、後に仏画師・洋画家・漫画家・日本画家として多様な分野で活躍します。1913年（大正2年）には渡欧し、安井曽太郎とともに印象派の巨匠ルノワールにも会っています。そして色調や形体等ルノワールの影響が濃厚な作品も残しています。後期印象派の抒情的風景画の洗礼も受けているのです。

様々な試行錯誤の末、ある時期、自身をすでに歴史の下降線をたどりつつある南画家とみなすことによって、まるで何かが吹っ切れるように、富岡鉄斎をおもわせる軽快でダイナミックな展開を見せるようになります。絹本着色の軸絵の不思議な構図や筆使いには迫力があり、人の心を捉えます。透視図法を用いない自由な構図は、平面的で、謎に充ち、また高度に物語的であります。また一貫して機知とユーモアを失わず、高齢になるほど、おおらかであり、筆致は滑らかで闊達であります。時流に逆らうように、文人画とも称される南画家であることで、芸術家として大胆な表現を示し続けることができたのです。そして彼の書がまた素朴で勢いがあり、絵画的魅力にあふれています。最晩年のおおらかに酒を楽しむ図や、自身の米寿を祝う漫画とも言える自画像は、笑いと共に人の生きる力を表した秀作と言えます。

美術館の企画に関わるものにとっても、千甕の軽やかでしなやかに展開し、独自性を強化しながら新しい地点に辿り着いた道程は、極めて現代的で、強力なメッセージとして受けとめることができました。

熊本市現代美術館館長　桜井武

川内倫子展 川が私を受け入れてくれた
2016年1月23日［土］ — 3月27日［日］

http://www.camk.or.jp

Contemporary Art Museum, Kumamoto

CAMK（キャンク）とは熊本市現代美術館の愛称です。

「アーティスト・イン阿蘇」アーティスツトーク

2015.10.31

熊本県が主催する「アーティスト・イン阿蘇」の招聘作家によるアーティスツトーク、そして当館の桜井武館長をコーディネーターとしたトークセッションを開催しました。7名の作家それぞれが阿蘇に滞在して直接感じた日本文化や阿蘇の自然、そしてそれをモチーフにして制作された作品について語りました。後半のトークセッションでは、ファインアート、テキスタイル、家具やデザインなど幅広い作家のバックグラウンドを聴きながら、今回の阿蘇滞在がどのような影響を作家に及ぼしたのか、またこのような事業でのキュレーションのあり方などについてトークが展開されました。多くの作家が小国杉の香りや木材の性質について、言及していたことが印象的でした。（A・A）【参加人数20人】

熊本市〝裏〟総合計画トークセッション「帰ってきた、熊本の未来をデザインする」

2015.11.15

熊本市が描くまちの未来設計図「総合計画」。その「新総合計画シンポジウム」開催に合わせて現代美術館で開かれたのは、「〝裏〟総合計画」のトークセッション！「〝裏〟総合計画」とは、妄想も含めて自由に自分たちのまちについて考えようという市民によって始まったプロジェクトです。これまでにすでに三回の「妄想会議」を開催し、熊本市の未来について奔放かつ真剣な議論を続けてきています。そして今回はついに〝表〟の総合計画とコラボレーションして同日のイベント開催となりました。トークの登壇者は、〝裏〟の総司令官・田中尚人さん（熊本大学）と、ゴレンジャーこと〝裏〟総合計画デザイナーたち。

今回ゴレンジャーが壇上で披露したのは、「熊本城で和装会議　文化×交流」「熊本市職員ホメゴロシ計画」「おたがいさま食堂」「空き家を宿化プロジェクト」といういずれも独創的な構想。今回は会場に集まった皆さんもワークショップ形式で参加して、これらの提案のさらなるブラッシュアップを図りました。途中、〝表〟総合計画のトップ・大西一史市長が突然会場に登場し、意見交換に参加。チームごとの検討を経て、いずれの計画もより具体的で実現を視野に入れたものになり、「せっかく考えたし、少しずつでも実行していくぞー！」という意気込みも聞こえてきました。会の最後には「妄想会議での提案が実はすでに一部実現され始めている！」という活動報告も行われました。（C・I）【参加人数40人】

詩の朗読会

くまもと詩の朗読の会共催の自作の詩の朗読会です

詩の朗読会　第143回
テーマ「見えるもの・見えないもの」

2015.11.26

今回のテーマは「STANCE or DISTANCE?」展にちなみ、「見えるもの・見えないもの」。発表された詩の一つに、「ケーキが好き」という言葉で、好きなケーキの種類や味の感覚を、まるで今ここに存在するかのように感じられる、好きであるという感覚を共有できる、といった内容の詩がありました。文字である詩を、言葉にすることで、受け手はその世界の中に飛び込むことができる。朗読されることで、慣れ親しんだ言葉でさえ一つの詩となるような気がしました。（K・O）【参加人数7人】

詩の朗読会　第144回
テーマ「港」

2015.11.26

今回は「港」をテーマに、飛び入り1名を含む10名の方が詩を発表してくれました「港」と聞いて、熊本県内にある三角西港や崎津漁港を思い浮かべた方や、「アイルランドの港」をタイトルに詩を作られた方もおられ、どの詩からも、海、船、旅などの情景が浮かぶようでした。また「港」にまつわるそれぞれの思い出や、出来事へ思いを馳せた詩もたくさん発表されました。（Y・M）【参加人数10人】

CAMKEESの活動

美術館ボランティアCAMKEES（キャンキーズ）による活動紹介

CAMK読みがたり第74回
テーマ「どうぶつ」

2015.10.17

10月の読みがたりは「どうぶつ」をテーマにした絵本や紙芝居、シフォン遊びなどをお届けしました。『とんとんトンネル』は、「とんとんトンネルくぐったら～♪」と歌いながら、カニからネコやタコに変わっていく手遊び。子どもたちもポーズをとりながらネコでは「にゃお」タコでは「にゅるん」と楽しく声を合わせていました。絵本『なが～いおはなのブタくん』は、昔ゾウのように長い鼻を持っていた「ブタくん」が、くしゅくしゅの短い鼻になってしまった理由が描かれたお話で、ページをめくるたびに動物たちの鼻や口ばしが立体的に飛び出てくるしかけ絵本。お話の終わりには、絵本からはみ出すほどの大きなブタくんの顔が飛び出し、みんな目が釘づけになっていました！（Y・M）【参加人数19人】

CAMK読みがたり第75回
テーマ「みのりの秋」

2015.11.21

今回のテーマは「みのりの秋」。『おべんとう』『やさい』といった絵本から、紙芝居「よいしょ よいしょ」、エプロンシアター「おいもほり」などをご紹介しました。中でも歓声があがったのはエプロンを舞台に見立てて物語が進むエプロンシアター。エプロン上の畑から、動物たちが「うんしょ、うんしょ！」と引っこ抜いたのは大きなさつまいも！見に来てくれたお友だちにも一緒に手伝ってもらい、最後はケーキにしてみんなでいただきました。（K・O）【参加人数19人】

CAMK読みがたり第76回
テーマ「クリスマス」

2015.12.5

今年最後の読みがたりとなる12月のテーマは「クリスマス」。寒空のなか、たくさんの子どもたちが集まってくれました。今回ご紹介したお話は、絵本『いないいないばあのほん』『さんかくサンタ』や、紙芝居「クリスマス」、手遊び「ちいさなメリークリスマス」など。サンタクロース姿のボランティアさんの登場に、子どもたちはニコニコ♪さらに手遊び「サンタになっちゃった」では、みんなでサンタさんになりました。（K・O）【参加人数12人】

月曜ロードショー上映報告

毎週月曜日14時・18時より　無料　定員90名

上映リスト（10／13～12／17）

10月19日	「野ばら」	1957年　オーストリア映画	89分
10月26日	「イマジン-ジョン・レノン-」	1988年　アメリカ映画	104分
11月2日	「ボリショイ・バレエ　スパルタクス」	1976年　ソ連映画	93分
11月9日	「伴奏者」	1992年　フランス映画	107分
11月16日	「間奏曲」	1936年　スウェーデン映画	97分
11月23日	「モロ・ノ・ブラジル」	2002年　ドイツ、フィンランド、ブラジル映画	109分
11月30日	「未完成交響楽」	1933年　ドイツ、オーストリア映画	88分
12月7日	「ストレンジャー」	1946年　アメリカ映画	91分
12月14日	「遺体 明日への十日間」	2013年　日本映画	105分

ミュージック・ウェーブ

展覧会や季節にあわせたコンサートを開催しています

STREET ART-PLEX KUMAMOTO協働事業

EXTRAVAGANZA 2015

2015.10.17

毎年秋に開催される「EXTRAVAGANZA」、今年の現代美術館会場には「火星接近Duo」と「大沼由紀Flamenco」の2組が出演しました。「火星接近Duo」は、ピアノとバスフルートのフリージャズユニット。綺麗な音色と、楽器に息を吹き込む音、その音の震えが静かな会場に響きました。かくれんぼのような「もういいかい?」「まーだだよ」というフレーズを繰り返す曲では、メロディが会話をしているような幻想的な雰囲気にお客様も引き込まれていました。軽快なリズムの曲では、踊るような演奏姿から楽しさが伝わってきました。2組目の「大沼由紀Flamenco」は、カンテ(歌)、ギター、2名のバイレ(踊り)によるグループ。ギターソロを含んだ4曲を披露しました。床をリズムよく踏み鳴らしながら、しなやかに踊る姿と、歌とギターの演奏が一体になっていました。たくさんのお客様が来場され、見とれてしまうような情熱的パフォーマンスで会場が熱気に包まれました。(Y・M)【参加人数70人】

STREET ART-PLEX KUMAMOTO協働事業
Great Composer Memorialシリーズ

フレデリック・ショパン

2015.10.17

今年のGreat Composer Memorialシリーズ「フレデリック・ショパン」は、熊本在住の小さなピアニストの皆さんと、ゲストにピアニストの正源司有加さんと三舩優子さんをお招きしました。国内外で活躍されている三舩さんは、サプライズ出演としてコンサートの始まりを《練習曲ハ短調 op.10-12 エチュード「革命」》《ノクターン 第20番 嬰ハ短調「遺作」》で飾ってくれました。美しいノクターンの後は、小学3年生から中学3年生までの子どもたちが出演。それぞれがショパンへの思いを込めて演奏しました。ゲストの正源司さんは、《ノクターン 第8番 変ニ長調 op.27-2》等3曲を披露され、会場からたくさんの拍手が送られました。ショパンの曲が幅広い世代に愛されていることを改めて感じるコンサートとなりました。(Y・M)【参加人数65人】

街なか子育てひろば

子どもたちのためのイベントを開催しています

街なか子育てひろばイベント

親子でアートを体験

2015.10.22

現代美術家の今田淳子さんを講師にお招きし、「親子でアートを体験」ワークショップを開催しました。今田さんいわく、子どもにとって「遊ぶこと=生きること」。今回は自宅でも簡単に手に入るA3サイズのコピー用紙を使ってアート体験を行いました。最初は紙を大きくびりびり破ったり、小さく桜吹雪のようにちぎったり、細長くちぎったりと指の力加減で、色んな形に変化していくのを楽しみます。また、紙をゆらゆらと振ったり激しく振りまわしたりすることで、手の感触の違いを感じてもらいました。最後は水で紙を濡らして破っていきます。水を使うと紙が重くなったり厚みが増したりと、また違った楽しみ方ができました。1枚の紙で無限の遊び方があることを、子どもたちと一つ一つ確かめながら、アート体験を進めていきました。普段お家では床一面に破った紙を広げる機会はなかなかないので、子どもたちも大はしゃぎで走り回っていました。(H・Ts)【参加人数26人】

街なか子育てひろばイベント

転入者のためのおはなし会

2015.11.19

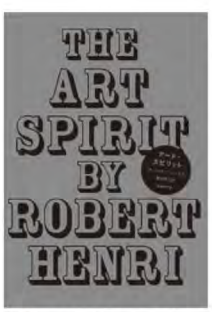
今回のワークショップは「転入者おはなし会」。人気企画のため昨年に続き今年も開催させていただきました。最初に3つのグループに分かれて、それぞれ熊本に転入してきたママさん同士でお話をします。転勤でいらっしゃった方や、ご両親が熊本出身という方など様々な理由で熊本に来られた皆さんですが、ママ同士はすぐに話が弾みます。また熊本県民にはおなじみの「あとぜき」にビックリした!という話には、転入者の全員が大きくうなずかれましたが、その様子に職員から「あとぜきって標準語じゃないんですか?」と逆質問が?!。最後は、おはなし会の間お行儀よく待ってくれた子どもたちと一緒に手遊びや体操をして、ワークショップを終了しました。(H・Ts)【参加人数26人】

ホームギャラリーからのお便り

ホームギャラリーからおすすめの一冊をご紹介いたします。

VOL.28

『アート・スピリット』



著者:ロバート・ヘンライ
訳者:野中邦子
出版:国書刊行会、2011年

20世紀を迎えようとしているアメリカにロバート・ヘンライ(Robert Henri, 1865-1929)という人がいました。彼は画家であると同時に美術教師でもあり、学校で教えたり展覧会を開催したりすることで、芸術を志す人たちに大きな影響を与えました。そして現在でも、世界中の人々が今回紹介する彼の著書『アート・スピリット』を通じて、その教えを学んでいます。

本書は、講義のメモや生徒へ送った手紙といった断片をランダムに寄せ集めたものです。目次だけみれば、一見、教本のようにも思えますが、決して技術の習得を目的とするものではありません。「彼[ヘンライ]を身近に知っていた者はその声や話しぶりをありありと思いだすだろう」と熱く紹介されているように、ヘンライが言葉で伝えようとした美術についてのスピリットがここには記されています。彼は常に、描きたいと思う動機やその人自身が内面に抱くものを重視し、それを導き出すことが自分の務めだと考えていました。だからこそ、自分自身を信じるようにと語りかける彼の言葉に、多くの人々が励まされたのでしょう。

本書は作品をつくる人や観る人だけでなく、何かに真剣に取り組もうとしている人に、自分の心の奥に立ち戻る機会を与えてくれる本です。

……余談ですが、本書のために寄せられた滝本誠さんによる解説は、本文との距離もあって、別の角度からおもしろく読むことができます。いわゆるヘンライ像を語るのではなく、彼の足跡を追いながら当時のアメリカ美術界の状況に触れられており、ヘンライについて、より大きな動向の中で知ることができます。ヘンライの教えそのものは時代に左右されるものではありませんが、一方で、20世紀のアメリカは、新たな作品の台頭や戦略などによって、美術史を編纂していったのです。(M・I)

「STANCE or DISTANCE? 私と世界をつなぐ〝距離〟」展

「STANCE or DISTANCE?」展
渡邊淳司ワークショップ
「自分の顔を探せ！-鏡が映す顔、心が映す顔-」

2015.11.1

出品作家の渡邊淳司さんによるワークショップを開催しました。渡邊さんと心理学の専門家の上田祥代さんを講師に、自分の顔のカードを使って、記憶の面白さに迫りました。まずは「単語を15個覚える」という簡単なゲームから。単語を見た後、読み上げられる単語のうち覚えているものについて手を挙げるのですが、似たような単語にも何割かの人が手を挙げました。そうしてしまうのは「作られる」記憶があるからとのことでした。

後半最初の課題は「渡邊さんの顔を当てる」。いつの間にか姿を消した渡邊さんを思い出しながら、顔のパーツをそれぞれちょっとずつ変えたカードを順番に見ていき、ワークシートに○×△で自分の予想を描きこんでいきます。10枚のカードを見ていくうち、「違いがわからない！」と悩む声が上がります。次は、グループの一人が仮面をかぶり、同じグループのメンバーが当てます。初対面の人も、親しい間柄でも悩んでしまいます。「目の違いは少しでもわかる」「鼻の高さの違いは気づきにくい」などと話す人もいました。最後には自分の顔写真でもチャレンジ。ばっちり正解の人もいれば、「人の顔は全部当てられたのに自分だけわからなかった！」という方も。「自分の理想の顔をカードにして配っていれば、それでイメージがつくれるね」というアイデアも飛び出しました。「人の顔の輪郭までよく見てない」と気が付く場面もあるなど、ゲーム感覚で記憶の面白さに触れて楽しんでいただきました。（A・M）

【参加人数35人】

「STANCE or DISTANCE?」展 CAMKレクチャーカレッジ

2015.11.8

「STANCE or DISTANCE?」展の企画者が、本展の企画意図、展示構成や出品作品についてお話しました。本展のテーマは、ずばり「距離」。人は自身のことを考えたり、他者と向き合ったり、社会の問題や世界の出来事について考える時に、そこには、かならず対象と自身とをつなぐ距離があります。インターネットの普及や、東西の冷戦構造が崩れたことで、この30年の間に物理的、心理的、感覚的、社会的距離は大きな変化を迎えました。この距離の感じ方や取り方は、科学技術の発展やライフスタイルの変化、育ってきた環境、歴史的背景や既存の制度によって変容します。そう考えた時に、この「距離（Distance）」とは、現代社会の時代感覚を強く反映したものといえるのではないでしょうか。

本展では、自己、他者、世界、自然／環境との「距離」に焦点をあて、ロボット、インタラクティブ・メディア作品、彫刻、絵画、写真、映像など60点の作品を紹介しました。大阪大学石黒浩研究室開発のアンドロイド、渡邊淳司＋安藤英由樹、藤井直敬らによる新作の体験型メディア作品、阿蘇でのリサーチを重ね制作された林智子のインスタレーション、国内美術館では初展示のミカ・ロッテンバーグやリー・ブラザーズの映像インスタレーション、藤田桃子の巨大日本画をはじめ、出品作品の解説を交えながら、展示構成、出品作品の展示意図について語りました。これら多様な作品を通して、人やもの、世界と向き合う「姿勢（Stance）」を見つめ直し、新しい関係性を築くきっかけが生まれることを願ってレクチャーを締めくくりました。（A・A）

【参加人数30人】

「STANCE or DISTANCE?」展 プレママ＆ファミリーツアー

2015.11.7

「STANCE or DISTANCE?」展のプレママ＆ファミリーツアーを開催しました。今回の展覧会では、絵画、彫刻、写真、映像をはじめ、ロボットや体験型の作品も出品されており、会場を入ると、人型アンドロイド「コウカロイド」が展示されています。思わず凝視してしまうような精巧なつくりにお母さんもびっくり！1歳の赤ちゃんも、自らの心音を聞きながら他者に感情移入していく作品《心音移入》を体験しました。映像で流れている様々な場面の人を見ながら、自分の鼓動はどのように聞こえたでしょうか。ツアー中、お母さんが赤ちゃんに語りかけながら楽しく鑑賞されている姿が印象的でした。（A・S）

【参加人数4人】

「STANCE or DISTANCE?」展 林智子ワークショップ 「涙の記憶：思い出のジュエリー」

2015.11.22&23

11月22、23日の2日間にわたって出品作家の林智子さんによるワークショップを開催しました。制作の前に、林さんの作品《Tear Mirror》について話がありました。《Tear Mirror》は世界中の人へ手紙を出して涙のエピソードとその人の涙を集め、それぞれのエピソードに合わせてつくったジュエリーのなかに涙を閉じ込めた作品。テクノロジーが数値で捉える感情に関して、疑問を抱いていた林さんは、食べることで感情の整理もできるのでは？という思いから、「琥珀菓子」に似せることを思いついたと言います。

最初にワークシートへそれぞれの涙のエピソードを書きこみ、その時の気持ちを色で表現するなど、イメージを膨らませていきます。

1日目の子ども向けのワークショップでは「どんな時に涙が出たのか？」という質問に、「怒られた時」と答え、それを誰に伝えたいかという質問に「お母さん」と素直に答える子どもたち。林さんも「かわいいかわいい」と喜ばれていました。なかには「自分」に涙が出たことを伝えたいと答える哲学的な子もいました。2日目の大人向けのワークショップでは、思わずスタッフもほろりとくるエピソードも披露していただきました。

題材が固まったら、温めて柔らかくなった樹脂にジュエリーを押し付け、型をつくると、温めた寒天に色水を少しずつ加えたものを流し込み、冷やして固めます。型から取り出すと、きらきらしたジュエリーが完成。つやつやしたその姿に、あちこちで「きれい！」と歓声が上がっていました。それぞれの色と形の、それぞれの思いが凝縮された思い出のジュエリーが完成しました！（A・M）

【参加人数16人】

「STANCE or DISTANCE?」展 安藤英由樹ワークショップ 平衡感覚移植体験

2015.11.28&29

「STANCE or DISTANCE ?」展会場入口で、出品作家で情報科学研究者の安藤英由樹さん（大阪大学准教授）による平衡感覚体験ワークショップを行いました。穴の抜けたヘッドフォンのような機械をつけて、水の入ったボウルを持ち、中に入った水を揺らすと、ボウルに浮かべた人形の平衡感覚が体験者に伝わり、右へ左へとふらふらとした足取りに。耳にあてたヘッドフォンから微量の電流が流れており、平衡感覚を司る部分に刺激を与えることでこのような感覚を感じるとのこと。不思議な体験は皆さんに大好評でした！（K・O）

【参加人数合計50人】

「STANCE or DISTANCE?」展 安藤英由樹アーティストトーク

2015.11.29

出品作家の安藤英由樹さんに、これまでの研究や、美術館や科学館での展示活動について講演いただきました。安藤さんの研究は、脳の情報処理の仕組みを活用して、錯覚を利用したインターフェースを開発すること。その技術開発を通して制作し、本展に出品されている《A day in their lives》《心音移入》、そして今回体験ワークショップを行った《Save YourSelf!!!》について、さらにこれまでにアーティストとコラボレーションした作品についてご紹介いただきました。安藤さんいわく、科学者・研究者は問題解決が目的であることに対して、アーティストは作品を通して様々な問題提起を行うことが活動の役割なのではないかとのこと。表現装置の研究開発をする安藤さんならではの視点で、身体をめぐる科学とアート、受け手側の反応について語っていただきました。（A・A）

【参加人数30人】

「STANCE or DISTANCE?」展 石黒浩×渋谷慶一郎×池上高志トーク＆渋谷慶一郎×コウカロイド ライブ・デモンストレーション

2015.12.6

展覧会最終日に、音楽家・渋谷慶一郎さんと出品作品の人型アンドロイド《コウカロイド》のライブ・デモンストレーション、そして石黒浩×渋谷慶一郎×池上高志トークを開催しました。ライブ・デモンストレーションでは、渋谷さんのラップトップのビートに合わせて、《コウカロイド》がフランス語でボリス・ヴィアンの詩の朗読をしながら、首を傾げたり、まぶたを動かしたりします。2015年2月にパリで行われたライブの日本凱旋ライブであり、国内では初めての開催となりました。

デモンストレーション後のトークでは、石黒さんはムハンマド・ビン・ラシド・マクトム・ナレッジ賞の表彰式のために急遽ドバイに赴くことになり、スカイプでのご参加。代理として石黒さんの姿をしたジェミノイドの頭部が会場に登場！渋谷さん、池上高志さん（複雑系科学研究者　東京大学大学院教授）に加え、本展に《The Mirror》を出品された藤井直敬さん（脳科学者、ハコスコ代表）と小川浩平さん（大阪大学石黒浩研究室）にも急きょトークにご参加いただくサプライズも！人の形をしていない「ロボット」ではなく、人の形をした「アンドロイド」が人間に与える想像力、人間らしさとは何かという話から始まり、人間の探究心、研究と表現、アウトプットの方法やスピードまで、サイエンスとアートについて多角的な視点で捉えた刺激的なトークとなりました。（A・A）

【参加人数130人】

井手宣通記念ギャラリー

「STANCE or DISTANCE?」展 関連展示

2015.10.17-11.23

「STANCE or DISTANCE？」展に関連して、「距離」を介した人とのつながりやコミュニケーション、情報との向き合い方をテーマに、当館の収蔵作品であるレオニード・ソコフの《Grandmother Nastya's Letter》、山ダイスケの《Private Castle》シリーズ、日本電信電話株式会社（制作：小林稔・石井裕）の《クリアボード》を展示しました。（A・A）

冬のテーマ展示

飛行する・俯瞰する

2015.12.3 -2016.2.14

2015年度冬の展示として、「飛行する・俯瞰する」をテーマに収蔵作品展示を行いました。会期の重なるアートパレードは、当館収蔵作家でもある八谷和彦さんが審査員であることから、収蔵作品より八谷さんの作品、なんと横幅4メートルを超えるジェットエンジン搭載のラジコン式飛行機《メーヴェ½》を展示しました。ほか、テーマに合わせて、青木豊、井手宣通、山口輝也、横山裕一の作品全5点を展示しました。澄み渡った空をゆったり飛びまわる気分で展示をお楽しみいただけますと幸いです。（H・T）

GⅢ ギャラリーⅢ（GⅢ）は、熊本、九州のアーティストを紹介し、応援していくスペースです

GⅢ vol.106 相撲生人形と押絵『西国三十三所観世音霊験記』展

2015.10.16-11.23

当館では、所蔵作品である安本亀八《相撲生人形》の存在と価値を市民に広く知っていただくため毎年作品公開を行っていますが、それと合わせて、生人形を生み出した熊本の市民文化に注目し紹介していくという方針で企画展を開催しています。本展では、益城町所蔵の押絵「西国三十三所観世音霊験記」の修復事業に注目し、修復済作品6点と作品下絵などの資料を紹介しました。

押絵「西国三十三所観世音霊験記」は、生人形師松本喜三郎の最高傑作《谷汲観音像》（浄国寺蔵）を制作するきっかけとなった伝説的な生人形の大興行「西国三十三所観世音霊験記」からインスピレーションを受けて1909-1913年に制作されました。この制作には3人の女性が関わっています。押絵作者は深浦春、背景及び人物の下絵作画を担当した小川マス、背景画を担当した中島千壽です。深浦春と小川マスは、共に小川の母に押絵技術を学ぶ仲でした。観音信仰に篤い深浦は、女子工芸学校（現・実践女子大学）で学んだ小川マス、そして中島千壽の助けを得て、20代後半の約5年間を費やし押絵「西国三十三所観世音霊験記」を制作したのです。年若く無名の女性たちが、志高く切磋琢磨しながら制作した作品群と言えます。

生人形興行演目を主題としたことから、人物の身振り・動作はダイナミックであり、登場人物としても、老若男女、神仏、貴族から庶民、妖怪まで多種多様、その衣装は豪華なものから質素なものまでバリエーション豊かに、色彩豊かに表現されるのが見どころの魅力的な作品群でした。益城町での修復後の全作品公開は2016年秋を予定されているそうです。（H・T）

相撲生人形と押絵展
トーク「押絵作品の修復について」
ワークショップ「押絵下絵を見本に行う線の練習」

2015.10.18

今回の講師は押絵「西国三十三所観世音霊験記」作品群の背景の修復を担当した大塚浩平さんです。

前半のトークでは修復について語っていただきました。修復は想像以上に大掛かりで、かつ繊細さを要する作業です。今年3月に33枚が完成するので、益城町に飾れば喜三郎の夢が叶うのではという思いで作業をされたそうです。

トーク後、会場を変えてワークショップがスタート。大塚さんからの「なるべく細く、筆を立てて」というアドバイスを受け、まずは線を描く練習です。皆さん集中して筆を動かします。続くお手本を写しとる練習では、押絵の下図をコピーした紙の中から、谷汲観音像を写し取ります。大塚さんから「まずは中間の濃さで衣装などを、次に顔と手を薄い墨で、最後に目を濃い墨で」と描く順番のアドバイスが。最初は力が入ってしまうため、手が慣れてから顔を描くといいのだとか。同じ絵でも写す人によって雰囲気が変わっていたようで、お互いに見せ合って、「きつめの美人さんやね。」「こっちはかわいい系」などの会話も聞こえてきました。参加者の皆さんが迷いなく筆を動かすようになっていく姿が、とても凛々しく見えました。（A・M）

【参加人数トーク55人・ワークショップ16人】

相撲生人形と押絵展
ワークショップ「押絵をつくってみよう」

2015.10.24

講師に押絵「西国三十三所観世音霊験記」作品群修復を手がけた押絵作家の浜田和代さんをお迎えし、初心者向けのミニ羽子板を制作しました。来年の干支に合わせ、モチーフは「申」。浜田さんがワークショップのために新しく下絵を準備してくれました。門下3人のサポートを受けながら制作開始。綿を芯とちりめんで挟んで作ったいくつものパーツを組み合わせることで、サルのモチーフが完成しました。羽子板にも布地を貼り、羽子板とサルの間に枕（小さなスポンジ片）を入れて角度を出し、より立体的に仕上げます。一度作り始めると、皆さんお昼休みも返上してしまうほどの熱中ぶり。完成したミニ羽子板は、きっとお正月にはお家の床の間や玄関先などでお披露目されたのではないでしょうか。（K・O）

【参加人数10人】

芸術文化出張講座

講師のアーティストとともに美術館をとび出し、学校などでも実演やワークショップを行っています。

現代邦楽CC

太鼓WS

日付	学校名学年参加人数	内容	講師
9.11	池田小［6年生73名］	太鼓WS	代継太鼓保存会
9.15	河内中［全学年96名］	弦楽アンサンブルCC	熊本ミュージックアーティスト
10.1	楠　小［全学年335名］	民謡と邦楽WS	田中祥子　ほか
10.2	松尾西小［全学年37名］	弦楽アンサンブルCC	熊本ミュージックアーティスト
10.4	芳野中［全学年43名］	表現WS	劇団きらら
10.7	銭塘小［全学年109名］	学校オリジナル	ビエント
10.13	杉上小［5・6年生118名］	能楽WS	菊本澄代、菊本美貴
10.16	泉ヶ丘小［全学年357名］	弦楽アンサンブルCC	熊本ミュージックアーティスト
10.16	東野中［全学年550名］	現代邦楽CC	松下知代　ほか
10.30	力合小［6年生124名］	声楽WS	福嶋由記
11.2	五福小［4年生45名］	声楽WS	福嶋由記
11.4	桜山中［全学年174名］	能楽WS	菊本澄代、菊本美貴
11.6	健軍東小［全学年329名］	フラメンコWS	林田紗綾　ほか
11.13	向山小［6年生76名］	尺八WS	釵虚霧洞
11.15	武蔵中［全学年337名］	民謡と邦楽WS	田中祥子　ほか
11.25	帯山中［1・2年生685名］	現代邦楽CC	松下知代　ほか
12.7	城南小［全学年369名］	現代邦楽CC	松下知代　ほか
12.10	豊田小［3年生54名］	声楽WS	福嶋由記

WS…ワークショップ　CC…コンサート

GⅢ-vol.107 熊本の華人展vol.11

2015.11.27-30

今回で11回目を迎える「熊本の華人展」。熊本で活動するいけばな20流派の競演により、今年は華やかな秋の花々が展示室を彩りました。

春の展覧会として定着していた「熊本の華人展」ですが、11回目となる今回は秋の開催となり、より多くの人に花に親しんでいただくため、ギャラリーⅢにて入場無料でご覧いただける展覧会となりました。大作3点を含む50点余りのいけばな作品を展示し、来場者の皆さんは各流派の多様なスタイルを楽しんでいました。（H・Ts）

GⅢ-vol.108 江上茂雄展

2015.12.5-2016.2.14

ギャラリーⅢの108回目の企画として、101歳まで「日曜画家」として絵を描き続け、約2万点の作品を残した江上茂雄の展覧会を開催しました。初期の水彩画から、江上作品を代表するクレパス・クレヨン画、植物細密画、即興絵画、木版画、そして約30年にわたって続けられた屋外写生画など、27点の作品を紹介しました。（A・S）

江上茂雄展 竹口浩司ギャラリートーク「江上茂雄という光」

2015.12.5

2013年に福岡県立美術館で「江上茂雄 風ノ影、絵ノ奥ノ光」展を企画された、同館学芸員の竹口浩司さんをお招きしてギャラリートークを開催しました。江上さんとの交流の中から感じ取られてきたその人柄や創作の背景など、色々なお話をお伺いすることができました。（A・S）

【参加人数15人】

編集後記

クリスマスが来たかと思っていたら、あっという間に年明けですね！今年の年賀状は消しゴムハンコに挑戦しました。温泉に入ったサルの図柄を考えて彫り、銅金銀のグラデーションで湯気を表現したり、温まったサルの顔を塗るのに大人の塗り絵用に揃えた色鉛筆の出番がやっと出てきたりと予想以上に楽しめました♪皆さん2015年はどんな年でしたか？2016年も素敵な年にしていきたいですね！

担当：大田黒翔代

Visitor's letter

アンケートに寄せられた感想（抜粋）を紹介します

相撲生人形と押絵展

・素晴しい作品がいろいろな方々と出会い、次の時代へと受け継がれていくことはとても貴重で、大切なことだと思います。全作品の修復を見るのが楽しみになりました。（市内・60代・女性）

・押絵の修復は、とても大事だと思います。良い形で保存されて本当に良かったと思います。（市内・60代・女性）

「STANCE or DISTANCE? 私と世界をつなぐ"距離"」展

・展示構成が見やすく、体験・体感できる現代アート展で大変良かったです。（市内・40代・女性）

美術館について

・ギャラリートークや講演会など多彩な内容があるのでとてもうれしいです。ピアノ演奏も癒されます。（市内・40代・女性）

［執筆者一覧］＊原稿の文末にイニシャル表記
岩崎千夏（C・I）［熊本市現代美術館事務局次長］
冨澤治子（H・T）［熊本市現代美術館主任学芸員］
坂本顕子（A・S）［熊本市現代美術館主任学芸員］
芦田彩葵（A・A）［熊本市現代美術館主任学芸員］
池澤茉莉（M・I）［熊本市現代美術館学芸員］
丸吉ゆかり（Y・M）［熊本市現代美術館学芸アシスタント］
大田黒翔代（K・O）［熊本市現代美術館学芸アシスタント］
塚本春菜（H・Ts）［熊本市現代美術館学芸アシスタント］
村上綾（A・M）［熊本市現代美術館学芸アシスタント］

ART KISS LETTER アート・キッスレター
vol.75新春号（2016年1月）【無料】
発行人：桜井武
編　集：大田黒翔代
デザイン：石井克昌（MOTOSHIKI）
印　刷：シモダ印刷
発　行：熊本市現代美術館
http://www.camk.or.jp
〒860-0845
熊本市中央区上通町2-3
電　話 096-278-7500
ファックス 096-359-7892

【次号は早春号（3月発行予定）】

奨　励　賞

《湯島の天使たち♪》は、完全に猫の奴隷になっておられますね（笑）。一般的な美術作品が陥りがちな、コンセプトにこだわりすぎず、思いっきり作っているところがいいです。素材の組み合わせもいいですね。

《幻のしいたけ 204 号復活！》は、技術のあるプロの撮り方ですが、2 年間じっくりしいたけを追いかけた姿勢に感動しました。カメラなどが手軽になり、誰でも映像を編集し、発信できる時代の可能性を感じました。

《IMAGE OF THE EAST&WEST BOX'S》は、東洋や西洋のイメージが混在し、人を喜ばせたいというような真心や、描く喜びが伝わってきます。

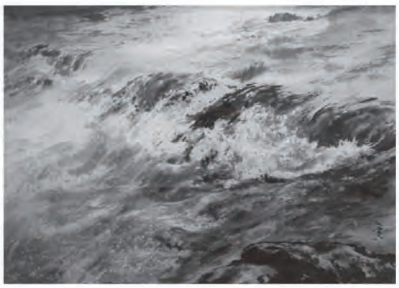
《川面の詩》は、水墨的な表現で、風景画の一種かと思いますが、波を描くのは難しいにも関わらず、画力を感じます。

《からっしー》は、普通のコンペなら選ばないタイプの作品ですが、これを着てフルマラソンを 2 回完走されたというエピソードにやられました（笑）。

湯島の天使たち♪
作／松藤久子
［部門／立体］

幻のしいたけ 204 号復活！　作／佐伯勝利
［部門／映像］

IMAGE OF THE EAST&WEST BOX'S
作／奥村一美
［部門／立体 ］



川面の詩　作／油井香
［部門／平面］

からっしー　作／かるろす
［部門／立体］

コラボレーターの会
特別賞

《心ウキウキ、ワクワク》は、生命をたぎらせたような絵で、「私たちもこんな絵を描いてみたい」と思い選ばせていただきました。

＊本作品は、コラボレーターの会の皆さんが選ばれました。

心ウキウキ、ワクワク　作／駒田幸之介
［部門／平面］

きもちは一緒　作／中島知宏
［部門／平面］

猫が飛んだ日　作／でおひでお
［部門／平面］

奨　励　賞

《きもちは一緒》は、非常に上手くサラッと描いているようでリアリティがあります。技術があります。

《猫が飛んだ日》は、一見わかりやすい題材ですが、実は猫や子どもの角度を変えていたり、かなり高度な表現をされている、印象的な作品です。

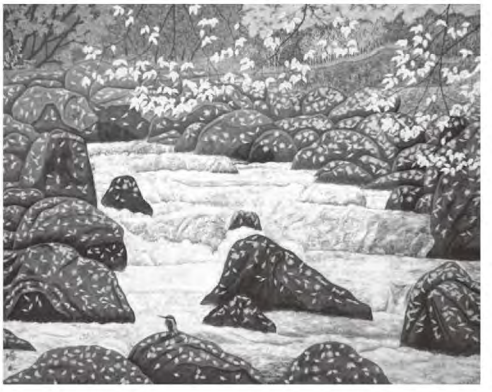
《ゲームクリア！》は、通潤橋とポップなゲームのイメージを組み合わせ、デザイン性がとても高い作品です。

《夕映》は、冷たい雰囲気ではなく、都会ならではのあたたかさ、美しさがあります。省略とリアリティが上手です。

《渓谷の秋》は、絵柄がレイヤー的に重なり合い、独特の日本画のような構成で独自性を感じました。

ゲームクリア！　作／sho_maa
［部門／平面］

夕映　作／鬼塚信子
［部門／平面］



渓谷の秋
作／角軍亀
［部門／平面］

ごあいさつ

熊本市長
大西　一史

「熊本市民美術展　熊本アートパレード」は、市民の皆様と共に創り、共に楽しむ「手作りの美術展」として親しまれ、平成元年の第1回開催から、今回で第27回目を迎えます。この間、市民の皆様から、合計10，881点ものご出品をいただいており、皆様の長年に亘る温かいご支援に、心から感謝申し上げる次第でございます。

さて、今回は、「なんて最高な日だ！（What a lovely day!）」というテーマの下に、芸術を愛する幅広い年齢層の皆様から270点もの力作をご応募いただいております。作品に込められた作者の想いが直に伝わってくる展覧会となっておりますので、ご来場の皆様には、市民美術の競演をごゆっくりとお楽しみいただきたいと存じます。

本市としましては、市民一人ひとりが心豊かに質の高い暮らしができる「誰もが憧れる上質な生活都市くまもと」を築くためには、このような市民の皆様から生まれる文化芸術の持つ創造性がますます重要な役割を果たすものと考えておりますので、皆様には、今後とも本市の文化振興になお一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、本展の開催にあたり、ご出品いただきました皆様、審査員の八谷和彦様、企画・運営にご協力いただきました「コラボレーターの会」並びに「熊本市老人クラブ連合会」をはじめ、関係者の皆様に厚く御礼を申し上げますとともに、本展を通して市民の皆様の文化芸術活動がますます輝きを増し、相互の交流が一層深まりますことを心から祈念申し上げまして、ご挨拶といたします。

優　秀　賞

《目の前》は、色数は多くないですが、ピンクやグリーンなどのペールトーンの配色の妙がある素敵な絵です。なぜ女の子が裸なのか気になりますが、不思議な魅力・バランスがあります。

《生命の賛歌》は、シンプルながら、色の対比も洗練されていて、全体に上手さがあると思います。継続して作っていることがわかります。

《Another Day》は、給水塔やアンテナなど、一見すると地味なものの中に美を見出して淡々と描いています。写実的ですが、奥を省略し、手前を描きこむなど、工夫や技術や感じさせます。

《Play and Snacks》は、子どもの頃の思い出などが詰まっていて、情報量が多く、楽しめる絵です。もっと大きい作品も見てみたいと思いました。

《はぁー疲れた》は、こどもって可愛いばかりではなく、ダダをこねたり、言うことをきかない場面も同じ位多く、その連続が子育てだと感じます。その日常は後で振り返るととても良く、いい表情がとらえられています。

目の前　作／光武美沙希
［部門／平面］

生命の賛歌　作／三藤有希子
［部門／平面］

Another Day　作／小島拓朗
［部門／平面］

Play and Snacks　作／河野基春
［部門／平面］

はぁー疲れた　作／田尻満潮
［部門／平面］

KUMAMOTO ART PARADE

審査員
メディア・アーティスト
八谷和彦

第27回熊本市民美術展

熊本アートパレード

会期：平成27年12月19日（土）
～平成28年1月10日（日）
主催：熊本市現代美術館（熊本市・公益財団法人熊本市美術文化振興財団）
協力：コラボレーターの会

テーマ	なんて最高な日だ！（What a lovely day！）	総出品数 270点

今回のテーマは「なんて最高な日だ！（What a lovely day!）」としました。これは実は、2015年に公開された映画『マッド・マックス』の中の言葉です。映画の中では、危機的な場面で「（死ぬには）最高の日だ！」という意味で、逆説的に使われているのですが、非常にネガティブな状況の中であっても、それを打ち破るような勇気を出したり、逆転の発想をしたり、また新たな自分を発見してほしいという気持ちがあり、このようなテーマを設定させてもらいました。予想以上にいい作品が多く、とても楽しく、また悩みながら、精一杯審査をさせて頂きました。

アートパレード大賞（熊本市賞）

作品講評／八谷和彦（はちやかずひこ）

アートパレード大賞の《**たしかにそこにあった無常**》は、熊本という土地柄のせいか全体として風景画が多かったのですが、その中でも、他で見たことがないような独自性を感じました。雲海のような空をベースに、ドラゴンや鳥のような具体的なイメージも配され、色使いも素晴らしい。作品タイトルも今回のテーマにマッチしていると感じました。

たしかにそこにあった無常　作／小川摩希子
［部門／平面］

熊本市現代美術館賞

熊本市現代美術館賞の《**HAPPY:)**》は、非常に上手い作品で、女性なのか、モンスターなのか、具体的なモチーフがあるわけではないのですが、背景にある物語を感じさせます。レイアウトや色使いも優れていました。

HAPPY:)　作／鈴木沙彩
［部門／平面］

審査員特別賞（八谷和彦賞）

逢いたいあの子は遠くへ行った
作／野田ちか子
［部門／映像］

八谷和彦賞の《**逢いたいあの子は遠くへ行った**》は、写真や映像だけでなく、作詞作曲、演奏や歌もご本人がなさったそうですが、とても良かったです。亡くなった家族と、現在の自分の家族写真をミックスして、自然に一体化させ、血の繋がりや作者の思いを感じさせます。編集も上手です。

井手宣通賞

井手宣通賞の《**ふり向けば・・・（ふる郷発見）**》は、これも白川を描いた風景画ですが、右上に空間をあけて、左から右下にかけて道を配し、そこに二人乗りのバイクを描くという構図が、現代の絵としてよくまとまっていると感じました。

ふり向けば・・・（ふる郷発見）　作／吉川博文
［部門／平面］